

1年C組	— ふわ フワ パシン— ソフトバレーボール	石本 倫章
------	---------------------------	-------

1 単元設定について

本年度の本校研究テーマである「学習文化の創造」を、体育科では“できないことをたのしみ、できることを願う子に”というサブテーマを設け、研究していこうと考えた。子どもにとって運動とは魅力的なもので、熱中できるものでもある。だから、子どもは、その子なりの楽しみ方をしていく。その中には、苦手意識が強くなり消極的になることもその子の関わり方として認めていこうとしていた。もちろん、始めはそれを認めていくのだが、苦手意識が強いからといって消極的になってしまうと、運動を楽しむことができないのではないかと考え、以上のサブテーマを設けたのであった。

本単元は「ソフトバレーボール」である。本単元で、子どもたちが自分たちに合ったゲームづくりをしていくことを期待していた。「ソフトバレーボール」だけでなく、ネット型の運動は勝敗を競い合うことを楽しむとともに、ラリーが続く楽しさが強い。ゲームであるから勝敗を意識はするが、それよりもボールを突き合うことの方が楽しくなるのではないかと考えた。ラリーの続く楽しさを味わおうとすれば、既成の「ソフトバレーボール」のルールではなく自分たちにあったルールを自分たちで考えていくのではないだろうか。その中で、自分たちがしっかり考え、熱中できるゲームができ楽しんでいくことが、『学習文化を創造』していくために必要だと思ったからである。つまり、本単元では、はじめから完成されたゲームを楽しむのではなく、もっと楽しむためにルールの共通化やマナーの必要性を話し合い、感じて欲しかったのである。それが、本単元の期待する子どもの学びであった。

2 実践の考察

(1)授業から

①反省 その1

本実践で反省点が二つある。そのことについて考察することにする。

まず一つ目は、第1時の活動の見取りについてである。

第1時は風船を使って風船つきをした。風船を友達と突き合うあそびであった。子どもたちは風船つきに熱中できた。それは、風船の魅力があったからである



う。適当に相手を探し、はじめは2人でおこなっていたが、だんだん人数が増え、数人で活動す

る子どもたちが多かった。数人になると、ゲーム的なあそびになってくる。ルールは「落とさない」がほとんどであった。点数化しているグループもいた。授業の中ほどで2面だけネットをはってみた。そこにいく子とそうでない子にわかれたが、ネットをはった場であそんでいる子は、下に強くたたきつけようとしていた。それは、ネットの魅力であろう。ネットをただ越すだけでなく、強く床にたたきつけたいと思うのが自然なのであろう。この時間で「落とさないで続ける」という気持ち(思い)が持てたので次時はソフトバレーボール(20g)を使用することを告げた。この時間は本単元の導入として大切に考えていたし、ほぼ予想通りの活動になっていたので、計画通り次時からソフトバレーボールにかえたが、少し反省ののこるところであった。もともと風船での活動を大切にしていたにもかかわらず、もともとの計画通りこの時間だけで終わってしまったからである。こちらの予想通り活動できたにも関わらず、反省がのこるというのは、教師の計画通りすすめてしまったということが大きい。この時間の子どもたちは、風船を手がかりに自分たちでゲーム化しようとしていた。だから、次時も風船をつかって活動していれば、もっと自分たちで共通のルールを考えついたのではなかっただろうか。結果としてそれを止めてしまった。わたしとしては、風船がソフトバレーボールにかわるだけで前時の活動の続きができるとか考えていたのが、まったく違う「あそび」になっていってしまった。だから、余計にもう少し風船で活動をさせてもよかったのではないかという反省が残るのである。

②反省 その2

もう一つは「むずかしさ」の見極めであった。体育科の提案の中に、子どもは運動が好きなので、できないことをできるようにになりたいという思いがあると書いた。本単元でも、子どもにとってのむずかしさは「ゲームがうまくいかないこと。」であると考えていた。だから、自分たちのゲームをつくっていくことを単元の目標においたのである。しかし、本学級の子どもたちにとって、ゲームがうまくいかないことより、ボール扱いがうまくいかないことのほうが大きな課題になっていったように感じた。もし、もっと多くの時間で風船を使っていけば、ボール扱いはむずかしくなく、ルール化に目が向いていったであろう。第2時からソフトバレーボールを使うことにわたしにとっては、まったく意図がなかったわけではなかった。ソフトバレーボールを使うとボール扱いがむずかしくなることはわかっていたつもりであったし、それを克服しようとするだろうということも予想していた。しかし、目標にゲームづくりを掲げたので、子どもとわたしのさせたいことのずれがあったのではないだろうか。

この2つの反省から、共通なルールを考えるゲームづくりをさせるのか、もっとたくさんボールを突きたいという自己の思いを実現させていくのかを明確にしていったほうがよかったのではなかったかという結論に至った。言換えると、本単元を「ゲーム領域」と考えるのか、「基本の運動」として考えるのかを曖昧にしないで、はっきり持ったほうがよかったということである。自分自身ははっきりもっていたつもりではあるが、既存のバレーボールのイメージを持ちすぎていたように考えられる。

(2)着目時から

①♠について

今回の単元で、彼の変容をわたしなりに描いてみた。

彼は、運動能力に優れ、どんなことも上手にこなしていく。しかし、なかなか本気になって学習に取り組めない。気が向けば真剣に取り組めるが、その気持ちが一定しないのである。そのことは、体育科だけの課題ではなくどの教科の学習にもあてはまるので、今の彼の課題であるとわたしは考えていた。

わたしなりに考えた変容の姿は以下の通りである。

はじめの姿：自分だけがボールをつく。ボールを独占する。

単元当初は自分がボールを独占し、常にボールをもっていた。数人で活動しているときも、みんなとボールを突き合うことより一人でバスケのドリブルのような活動をしていたので、他の子の不満が大きくなってきた。チームにわかれた後も、「自分だけがボールをついている。」という不満が女子を中心にさらされた。見ていると、自分が小さく、何度もボールを突きながらネットの近くまでボールを運び、そこから思いきりボールをたたきつけているのである。当然、同じチームの子は楽しくないし、相手チームの子は反則だと感じたようである。そこで、その不満を取り上げ、「同じ子が何度もボールを突かない。」というルールを共通化した。また、ボールを独占するとまわりの子が楽しくないのではということも考えあった。

以上のことをくりかえしていくと、以下の姿に変わってきた。

途中の姿：まわりの子に気を使いだす。チームの子にボールをまわす。

本単元でも、わたしの予想通りになっていった。これは大きな変容である。ほとんど自分中心であったものがまわりの子を意識し、ハスをしだしたのである。もともと運動能力が高いので、自分がその気になるとすぐにできてしまうのである。

この変容は、まわりの子に不満を言われるから仕方なしに変わっていったとみることもできる。だから、この姿だけでは今もっている彼の課題を克服したといえない。自発的に真剣に学習する姿になっていないからである。

だから、以下の姿を彼の課題克服した姿とした。

最後の姿：彼を中心にチーム意識が芽生え、自分たちの課題に向かう。

結論から言うと、彼は「最後の姿」にならなかったように思えた。わたしの設けた「最後の姿」に無理があったのかもしれないが、彼自身が自発的に、主体的に、真剣に学んでいく姿には不十分だったからである。彼が熱中できる単元構成ではなかったという反省がのこった。彼にとってはもっと勝敗を意識させた学習の方が、真剣に取り組めたのではないだろうか。勝敗を競い合う

学習を1年生ということであまり考えなかったが、本単元で十分おこなえることがわかったので、単元構成を再考していけるのではないだろうか。

3 今後の課題と展望

教科提案では、「起源的な楽しさ」を切り口にして学習に真剣に取り組んでいる姿とした。しかし、運動の「起源的な楽しさ」は切り口としてはまだまだ大きい。また、苦手意識が強くなるだけで、力いっぱい「はしる」「とぶ」「なげる（ける）」ことをしなくなるのは学年が上がるにつれてであり、ほとんど抵抗のない低学年や中学年では、これだけで学習に真剣に取り組んでいる姿とはいえないのである。誰もが運動に熱中していく積み重ねが学習文化になっていくという考えは来年度も引き継ぐことである。だから、子どもたちが自分たちで切磋琢磨しながら、運動の楽しさ追求していく真剣な姿をもとめていきたい。そのために、学年に応じ真剣に取り組んでいる姿を明らかにして研究する必要性を感じた。

今年度は、学習文化を創造していくためのエネルギー（うまくいかない、できない）に焦点をあてていったが、来年度の展望としては、子どもが真剣に取り組める学習過程を再度吟味していくことが必要であろう。子どもはできないことがあるとそれを克服しようとする。だから、できないことやうまくいかないことは学習の起爆剤のようなものになっていく。しかし、真剣な学習を続けようとするだけでは起爆剤だけでは不十分である。自らの手ごたえが感じられるような単元構成や目標の設定がより必要になってくる。ただ、単元構成や目標の設定などといったことは今まで吟味してきたことであるので、来年度は、一つの領域（例えばボール領域）にしばって研究していくことも大切ではないだろうか。

4 実践研究テーマの設定

上記のように、来年度の実践研究テーマは今年度よりもう少し細かい切り口を設けたい。例えば、教科提案のサブテーマには真剣に学習している具体的な姿をおき、それに迫れるように実践を重ねていきたいと考えている。また、今年度は校内研では「とびばこあそび」（基本の運動領域）、研究会では「ふわ・フワ・バシン」（ゲーム領域）というように、個人と集団の運動の両方を提案した。しかし、領域をしばることも検討してみたい。領域をしばることによって、違う運動においても同じ着目児をおい続けられるし、子どもからみた運動の特性も明らかになってくるからである。特に、ボール運動領域での子どもたちの学習を研究していくことを考えている。集団での個人のあり方、役割を考えていきたいからである。